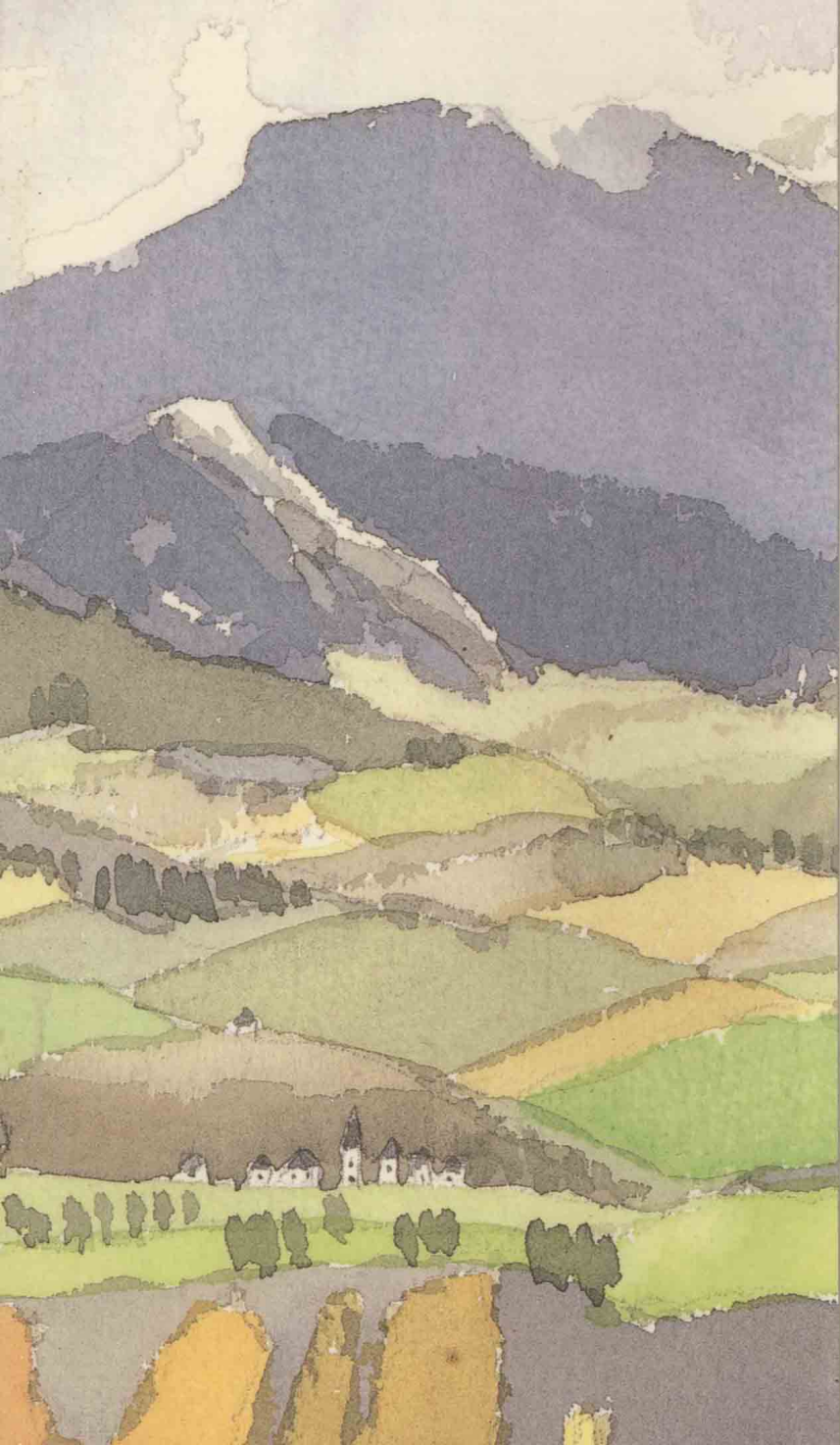




大いなる自然

新・ちくま文学の森
12

筑摩書房

大いなる自然 〈新・ちくま文学の森12〉

一九九五年八月二十三日 第一刷発行

編者 鶴見俊輔 (つるみ・しゅんすけ)

安野光雅 (あんの・みつまさ)

森毅 (もり・つよし)

井上ひさし (いのうえ・ひさし)

池内紀 (いけうち・おさむ)

発行者 森本政彦

発行者 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一五―三 ㊟ 二二

振替〇〇一六〇―八一四―一二三

装本 安野光雅

印刷所 三松堂印刷

製本所 鈴木製本所

乱丁・落丁本の場合は、御面倒ですが左記に御送付下さい。送料小社負担にてお取替致します。ご注文・お問い合わせも左記へお願いします。

千三三一 大宮市柳引町二一六〇四 筑摩書房サービスセンター TEL〇四八―六五一〇〇五三

©S. TSURUMI M. ANNO T. MORI H. INOUE
O. IKEUCHI 1995 Printed in Japan

ISBN4-480-10132-2 C0393

目次



岩 オマハ族の歌 金関寿夫・訳 6



御神木の切口 尾崎一雄 9

ボライ タゴール 牧野財士・訳 15

赤蛙 島木健作 29

冬を越したハチドリ サローヤン 関汀子・訳 43

へビの神秘 ハドソン 寿岳しづ・訳 53



住んだ場所とその目的 ソロー 佐渡谷重信・訳 67

山・雪・星 野尻抱影 97

ワサビ盗人ぬすびと

.....

井伏鱒二 105

槍ヶ嶽紀行やりがたけ

.....

芥川龍之介 121

山

.....

今西錦司 133



雷見舞らいみまい

.....

岡本綺堂 147

生神

.....

小泉八雲 田代三千稔・訳 165



青春

.....

コンラッド 橋口稔・訳 177



人間の土地より

.....

サン・テグジュペリ 堀口大学・訳 237

サハリン島より

.....

チーホフ 松下裕・訳 267



イヴァン・ベリンのあやまち

ヨフコフ

真木三三子・訳 ……

315



ミッサザイの神が語った話 …

山本多助 ……

337

沼ぬま

………

吉田健一 ……

355

かげろう紀行 ……

花田清輝 ……

375



毒人参どくじんじんをのんだプラトン

解説にかえて ……

鶴見俊輔 ……

390

大いなる自然

オマハ族の歌 金関寿夫・訳

岩——儀式の歌の断片

かぎりなく遠い

むかしから

じっと

あなたは休んでいる

走る小路のまんなかで

吹く風のまんなかで

あなたは休んでいる

鳥の糞を身体いっぱいにかぶって

足もとから草をぼうぼうと生やして

頭を鳥の棉毛で飾られて

今も伝わるアメリカ・インディアン
の口承詩のひとつ。何の儀式に
使われるのか不明。

あなたは休んでいる
吹く風のまんなかで
あなたは待っている
年老いた岩よ

御^ご神^{しん}木^{ぼく}の切口

尾崎一雄

尾崎一雄^{おざきかずお}

一八九九（明治三二）—一九八三（昭和五八） 三重県宇治山田の生まれ。早稲田の国文科在学中に「二月の蜜蜂」を発表。長い不遇時代ののち、「暢気眼鏡^{のんきめがね}」で芥川賞。戦後、病苦のなかで「こおろぎ」（昭和二年）「虫のいろいろ」（昭和二三年）を発表。小さな生きものに託した名作として高い評価を得る。またユーモアあふれた一連の芳兵衛物によって独自の作品世界をつくりあげた。「御神木の切口」は昭和四十五年の作品。

一月十九日、近くの宗我神社の拝殿で「松の木伐採式」というのが行われた。旧六ヶ村の氏子の主だった人々三十人ほどが集り、松を買う側の人も何人か参列、神官ののりとにつづいて各自神前に玉串をささげた。買う人と、実際に伐る人とは、神官と共に二本の松に玉串をささげ、酒をそそぎ、礼拝してから幹に鋸の歯を（儀式的に）入れた。あと、皆で乾杯した。私は前神主の家の者ということで、特に招かれたのである。

社の本殿の西側に、素姓よくのび上った一本松は、一昨年の春ごろ、梢高く枯色を見せ始めた。去年に入ると枯枝のふえ方は急ピッチになり、だれの目にも、枯れるな、とはっきりわかるようになった。神官と氏子との間で、その一本松と、もう一本の松、合せて二本を伐る相談が決ったのは春のことだったと思う。

私は、松の伐られるところを見届けたい、と思った。それらの松は少なくとも五百年ぐらいの樹齢かと見られた。私の家は代々の神社の神官をしていた。祖父が、現在の神官の父なる人に長い間の家職をゆづったのである。

私は、幼いころから見慣れた松の巨木の伐られることに寂しさを覚えたが、枯れた以上仕方がないと思った。もう一本の方も、やがて枯れる運命にあるらしい。つまり、マツクイ虫

にたかられたのである。

伐採式の翌日、まず枯れた一本松の方を伐ねることだった。音がしたので行ってみると、小型のチェーンソーを使って、松の根元を整えていた。

根元に近いあたりから、かなりの量の釘が出て来た。丸釘である。角釘は無いだろうか、ときくと、角釘は中に入ってしまったている、とチェーンソー使いの青年が言った。なるほど、と思った。

この松は御神木ごしんぼくと言われていた。敗戦まではしめなわがまかれてあった。私は子供のころ、うしみつどきと言われる深夜、神社の方角で起るコーンコーンという音におびえた。ワラまは紙で人型をつくり、のろいをこめた釘で御神木に打ちつける。そういう呪詛者じゆそしやの顔がやみの中に浮うかんで、私は布団ふとんをかぶり耳をふさいで、ふるえた。

大正中期に東京へ出たので、その後のことはわからぬが、隣人りんじんの言うところでは、昭和の初めまで、釘の音がたまに聞かれたらしい。昔の角釘は樹きの育つにつれて幹へ埋うまったはずである。

枝を打たず（切らず）そのまま北西方へうまく倒たふされた松の切口は直径一メートル五十五センチあった。高さは三十メートルぐらいで、その半分ほどが素姓よくのびている。

年齢は、正確にはかぞえられぬが、三百八、九十一——まア四百年という木であった。百五十年ぐらいまではどんどん育っており、二百五十年を越すと遅々ちぢたる太り方であることがわ

かった。この木にはムササビの夫婦がすみついていて一匹はつかまり、一匹は逃げた。

もう一本の方は、拜殿と神楽殿の間にそびえる三本松のうち一番太い木である。これはまだ、梢に枯色は見えないが、マツクイ虫にはたかられているらしい。

この松は、境内中どの木よりも一番大きい。前の御神木が、目通りで周囲三メートル八センチぐらいだったのに対し、この方は四メートル五十ぐらいある。この木は、あらかじめ枝を打ってから倒すのだそうだが、まだ作業は始まっていない。

マツクイ虫というのは、アメリカから来たものと聞いたが、本当なのだろうか。私は倒された御神木の皮をはいで見たが、外見はさしたることもない皮の裏側が全くひどいことになっていて驚いた。樹の木質と皮との間にある形成層が、それこそ完膚なきまでにくい荒らされている。形成層は、木には木をつけ皮には皮をつけ、という工合に、木をふとらせる機能と共に、根が吸い上げた水分養分を枝葉へ届ける役を受持つ——と昔中学校の博物の時間に習ったと思うが、そういう大切なものがこんなふうにやられては仕方がないと思った。

松を伐りに来た何人かの人は、こういう仕事の専門家で、買手手のついた木を伐って歩く。したがって、方々の樹のことを知っていた。彼らの一人はマツクイ虫の防除その他樹林保護対策は、近県では静岡県が比較的良く、神奈川県は不十分、千葉県はもっと悪い、と言った。大体松の四百年以上というのは少ないそうだ。そして神奈川県下の大きな松は次々とだめになつており、宗我神社に残る二本が目立つ方だろう、ほかには思いつかない、と彼は言った。

三本松の一番大きい一本は近く伐られ、二本が残る。しかしその二本も、いずれは虫にやられるだろう。何とかならぬものか、と思うだけで、私にはどうしようもない。